序文

秋山先生を送る言葉

教養文化研究所長　竹中彌生

本年は経済学部の秋山洋子先生と心理学部の井上勝先生が定年を迎えられ，退職なさいます。お二人の先生の長年に亘るご厚誼とご指導に対して心よりお礼を申し上げます。

論叢の本号はお二人の先生の退職記念号であります。

秋山先生には，様々な形で本当にお世話になりました。特に研究所の所長を勤められた2007年度から2009年度まで，そして所長退任後も，顧問あるいは相談役とも言える形で貴重なご助言，ご援助をいただき，研究所の運営に多大な貢献をしていただきました。

また，2008年度から新設された外国語教育センターでも，センターの運営だけでなく，センターに関わる教職員，学生のために様々な場面で助けていただき，どれだけお礼を申し上げても足りません。

先生は東京大学文学部卒，同大学大学院修士課程終了。中国文学と中国語を専攻されました。大学院終了後，都立高校で教鞭をとられ，タウン誌記者，翻訳家などとして活躍されました。その間，ご家族とともに7年間ソ連時代のモスクワにも滞在されました。本学には1994年に中国語と日本語の非常勤講師として就任され，95年から経済学部に日本語担当の専任の助教授として就任され，2003年に教授になられました。中国文学とジェンダー論がご専門で，『私と中国とフェミニズム』（インパクト出版会，2004年）『美女／悪女／聖母』（翻訳，エリザベス・ウォーターズ著，群像社，1994）を始め，多数の著書，翻訳，論文を執筆され，中国，韓国を始めとする海外の国々でも講演をしていらっしゃいます。

秋山先生について特筆すべきは本学留学生制度に対する多大な貢献です。先生は本学での17年間，留学生たちの入学直後のガイダンスに始まり進路の相談に至るまで，日本語の授業だけでなく，様々な形で大変親身になって留学生たちのお世話をして下さいました。

先生は，交換留学生受け入れ開始当初のことから今日に至るまでの本学における留学生の状況の全てを把握され，克明にご存知です。留学生交流会へのご助言や留学生のス

ピーチコンテストなど，留学生の支援のための基礎も築いてくださいました。そして何よりも授業を通して，留学生の一人ひとりを大変よくご存知です。先生は本学の留学生教育の大黒柱でした。

現在150人近くを数える本学の留学生の質は，他大学に比べて大変優れていると言われています。優れた学生が集まるのには学生たちの口コミによるところが多いと思われますが，本学に優れた，まじめで熱心な留学生が集まってきているのには，秋山先生の功績によるものが大変大きいと言えます。このような先生を今失うことは，本学にとっては言葉では言い表せない大きな痛手です。

秋山先生は本当に若々しく，あらゆる意味でエネルギッシュで，今年で定年退職のお歳とは，とても信じられません。先生が本学を去られることは，真に残念の極みですが，致し方ありません。まだまだお元気な先生には，本学ご退職後も是非思う存分ご活躍いただきたいと祈念し，又，今後も時に後輩のために，ご助言，ご支援を賜るようお願いし，先生をお送りする言葉と致します。

井上先生を送る言葉は筑波大学時代から先生をよくご存知の青山先生にお願いいたしました。

井上先生を送る言葉

青　山　征　彦

本学で心理学が専門科目として本格的に教えられるようになったのは，現代文化学部に心理・人間コースが開設された2001年からである。当時は学生の定員が50名と，こじんまりとしたものであった。その後，2003年には心理学科が設置され，さらに2009年には心理学部が設置された。現在は，一学年が150名を超えるまでになった。

井上先生は，心理学科の教員として，2005年に本学に着任された。私は先生の前任校で末席に名を連ねていたこともあって，着任前から先生のことは存じ上げていた。とはいえ，先生はすでに高名な方だったから，やや緊張してお迎えしたというのが本当のところである。だが，先生には，じつに気さくに接していただいた。私が2001年に本学に着任したころは，心理学の教員は自分を含め，全学で4人しかいなかった。

だが，毎年少しずつ着任が続き，井上先生がいらっしゃったことで，ようやく学科要件である６人の教員が揃った。やっと形ができた，という気がしたのを覚えている。

井上先生には，老年心理学に関する講義を中心にご担当いただいた。本学の心理学領域の特色の一つに，法心理学をカリキュラムに置いている点が挙げられるが（法心理学は新しい領域のため，全国的にも珍しい），先生の老年心理学も，本学のカリキュラムを大いに特色あるものにしたと思う。かつて発達と言えば，赤ん坊が成人になるまでのプロセスのことであった。ところが，一口に成人と言っても，30代と50代では悩むことも違うだろうし，社会的な役割も異なることが多い。そのため，いわば大人も発達しているのだ，という視点が生まれてきた。それが生涯発達という考えかたなのだが，老年心理学はまさに生涯発達を扱う領域として成長してきた。たいへん興味深い分野ではあるが，まだ教えられる人は限られているというのが実情である。この分野の開拓者である井上先生にじかにご指導いただけたのは，学生にとっても幸運なことだったと思う。

井上先生の講義には，いつも大勢の学生が参加していた。多くの若者にとって，老年期は未知の世界である。それを垣間見る興味深さがあったには違いないが，それ以上に井上先生の楽しいお話と，お人柄があってのことだろう。ゼミも人気であった。オリエンテーション・キャンプでは，先生秘伝の中締めがいつしか名物になった。これも楽しい思い出である。

大学のおかれる状況が大きく変化する中，2007年度の終わりごろになって，急遽，心理学部を設置することになり，あわせて心理学の大学院を設置せよという命が下った。学部と大学院の同時設置というのは，相当な無理難題であるのは言うまでもない。そんな状況にあって，井上先生は大学院設置を担当され，2009年には初代研究科長に就任された。どんな組織も，立ち上げには苦労がつきものだが，心理学研究科も例外ではなかった。発足してからも問題は山積みであった。その中心にあった井上先生には，たいへんなご苦労があったと思う。

現代文化学部，心理学部のいずれにおいても，先生はとても重みのある存在であったと思う。若いころにはよくわからなかったが，組織にはそういう存在が必要なのだ，と近頃はわかるようになった。ご退任はまことに残念だが，心からおつかれさまでしたと申しあげたい。本当にありがとうございました。